

# おやつのじかん3 -ちょっとひとやすみ-

一凸凹の中でも“学ぶ”手応え一

NO. 54



新しい生活様式ならぬ“新しい仕事の仕方”が降りかかってきています。あの“リモート会議”というヤツです。在宅勤務が推奨され、会議や研修もリモートで、という流れにどんどん進んでいます。パソコンの苦手な私（たち）にとっては、最初はこわごわ、言われるがままに操作し、ハブニングにはもちろん対応できません。「教えてください」「助けてください」と、分かっている方に何度も助けていただき、ようやく慣れてきたところです。パソコンの説明は、だいたい何を言われているのかがわかりません。言葉の意味がわからない。「ここを押してみてください」と言われ、やってみて、「なるほどね」と理解できたような…、でも次はまた頭が真っ白に。それでもやらねば進めない。「すみません…また教えてください」と聞き直っています。

少し大きくなった子ども達を見ていると、できているように見える中にも凸凹があって、困っていることや、分からないでいる思いが潜んでいることが少なくありません。苦手感を素直に出せず、何とかその場をしのごうと振舞います。ふら～っとその場から静かにいなくなる子、落ち着かなさをおしゃべりで解消しようとする子、他の子を気にするふりをして手元がおろそかになっている子、その場を上手く過ごすために編み出した、その子なりのほぼ無意識な知恵なのでしょう。「わかりません。教えてください」「上手くできないので手伝ってください」と言えなかった経験の積み重ねです。その子なりのプライドだってありますから。でも、きっと子ども自身も、何が分からないのかよく分からなかったから、HELPも出せずにこれまで過ごしてきたのだと思います。

『得意なことを伸ばして、苦手なことを引き上げていこう』というのが、支援の大切なポイントのひとつとされています。これは、『できた手応えや成功体験を重ねていくことで、不得意なことにチャレンジする意欲や余裕を子どもの中に作っていこう』とも言い換えられます。人は、何かが満たされて初めてチャレンジができるのだと思います。できる自分を別のことで感じられていれば、苦手なことにもトライしようとする気持ちも湧いてくるのです。そのためには、そばにいる大人が子どもの見立て(その子の力の理解)と舞台づくりをしていく必要があります。

先日、こんな光景がありました。制作が得意ではないその子は、取り組みながら、まあよくしゃべる。他の子のことが気になり、その場に関係のない話をしていて、なかなか作業が進みません。内容は、その子が十分こなせるものを用意しました。気持ちとしては、ちょっと頑張りが必要だったと思います。完成して終わり満足できるよう、要所は手伝い、褒め励まし、徐々に手を引いていく配慮はしながら回数を重ねていきました。すると、徐々におしゃべりが減ってきました。最後は無言で取り組む姿をそっと見守る支援でした。おしゃべりをすることで、苦手感を解消していたのですが、“できる”手応えが“楽しさ”“真剣さ”につながり、黙々と取り組む姿に変わったのです。きっと“とにかくやってみなさい”では、苦手体験の上塗りだけだったと思います。

「わからないことがあったら聞いてください」のアナウンスだけでは、声にできないこともある。入口はやさしいところから、そして何度もサポートを受けながら、成功体験を重ねていきたい。苦手なジャンルは頼ればいいんです。分からないでいるより、ずっといい。(R2. 11)K

